

国立民族学博物館の収蔵品 ⑦2

# 世界で一番有名な奴隸船ブルークス号



アフリカ展示場には、「歴史を掘り起こす」と題されたアフリカ史のセクションがある。アフリカ史の展示にこれだけのスペースを割いている博物館は、日本では他に類を見ない。ちょうどこのセクションの出口付近に、奴隸交易を展示する一角がある。奴隸の輸送時に用いられたとされる鎖や足かせに、まず目が行くだろう。しかし、今回注目したいのは、それらの入ったボックスの右端に貼られた奴隸船の図である。遠目だと何か模様でも描いてあるのかと思うが、近づいてよく見てみると、その模様が無数の横たわる黒い人型であることに気が付かされる。それらは、この船にどれだけの奴隸を積めるのかを示している。

この図の船はブルークス号という。おそらく世界でもっとも有名な奴隸船である。一七八一年にリヴァプールで建造された二九七tのこのブルークス号は、記録の限りでは、同年から八八年までのあいだ、

リヴァプールを出港し、西アフリカの黄金海岸で奴隸を積み、ジャマイカのキングストンに運んだのちに帰港するという航海を四度した記録が残されている。全長約三〇・五m、幅約七・六mほどのそれほど大きくない船体で、図に描かれた人型が四五四体に達するのは壮観だが、現実の航海では、毎度、五八〇名以上の奴隸を積んでいたことが明らかになっている。ただ、こうしたことはこの船に特徴的なことではない。大西洋奴隸交易に関して十六世紀から十九世紀までの三万四千強の航海記録を精査したデータベース ([www.slavevoyage.org](http://www.slavevoyage.org)) を参照すると、船の平均的な大きさは一五七・八t、積載奴隸数の平均値は三〇九・四となる。

一七八八年にリヴァプールに戻ったブルークス号は、その名を後世に残すきっかけをつかむ。同年、英議会は船体の大きさによって輸送できる奴隸数を制限する法を成立させるのだが、その際、議会が実態調査の一環として奴隸船を実測したうちの二隻がこのブルークス号だった。そのような経緯で計測された図がプリマスの奴隸交易廃止協会の手に渡り、人型をそこに描き込むなど加工され、大量にポスターとして印刷されたのだった。この調査を命じた当時の首相ピット自身が秘密裏に協会に原図を手渡したと推測する研究者もいるが、詳細な漏えいの経緯はいまだ不明である。その後、この図はすぐにロンドンの奴隸交易廃止協会の目に留まり、彼らの手で再加工され、より広くに知られるようになった。民博に展示されているのは、このロンドン・ヴァージョンになる。

一七八九年以降のブルークス号の活動はよくわからないが、一八〇七年、アルゼンチンのブエノスアイレスで拿捕され、奴隸輸送の役目を終えたとされる。他方、ブルークス号の図は、その後、奴隸交易の悲惨さを如実に伝えるイメージとして繰り返し、世界中の書籍や展示などで繰り返し用いられていった。二〇〇七年の英議会における奴隸交易廃止決議二〇〇周年に際しては、イギリスの大学生たちが、この図の通りに広場に横たわるといふパフォーマンスを行った。ブルークス号とその図がたどった別々の数奇な運命を頭の片隅に、奴隸展示を見てほしい。

(鈴木英明)